

日本初期写真史 関東編 幕末明治を撮る

History of Early Japanese Photography: Kantō District Images of Japan, 1853-1912

2020年3月3日(火) - 5月24日(日)

※新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、本展覧会は3月31日(火)まで開催休止と致します。なお、4月1日以降の情報につきましては、改めて当館ホームページでお知らせいたします。



左) 制作者不明《(東京向島)》明治20年代 鶏卵紙に手彩色、右) 下岡蓮杖《(相撲)》慶応3-明治4(1868-71)年頃 鶏卵紙
ともに東京都写真美術館

展覧会概要

東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団では、Tokyo Tokyo FESTIVALの一環として「日本初期写真史 関東編 幕末明治を撮る」展を実施いたします。

日本における写真文化のセンター的役割を担う東京都写真美術館では、毎春、初期写真に焦点を当てる展示を行っています。本展覧会は、高橋則英氏（日本大学芸術学部写真学科教授）の監修のもと、幕末明治期における関東地方の写真文化をひもとく展覧会です。

本展は三章構成とし、一章では、欧州で発祥した写真が日本において普及するまでの歴史と、当時の写真技術を紹介します。二章では、関東地方を訪れた写真家や写真技術者の活躍を展覧し、さらに一都六県で開業した写真家たちも紹介します。最終章では、ペリーの肖像写真から建設中の東京駅まで、激動の関東地方の様子を、バラエティに富んだ初期写真で見渡します。

本展は、日本写真の起源に深く関わる関東の初期写真群を一堂に会し、その積層する写真文化を俯瞰する貴重な機会です。

文化でつながる。未来につながる。

みどころ

1 「初期写真」とはなにか。日本写真史の源泉を見つめなおす展覧会

“写真術は目に見える世界の像を支持体の上に画像として固定する技術である”

近年のデジタル技術の発達によって、「写真」は変化しました。写真が「モノ」としての形状をもっていたことや、技術者の手による制作の工程が含まれていたことを想像することが難しくなりつつあります。本展は、日本における最初期の写真文化に着目し、「初期写真」ひいては、「写真」の成り立ちと存在意義に向き合うための決定版となる展覧会です。

※高橋則英「幕末明治の写真術について」本展図録より参照

2 関東を代表する写真家たちが活写した、幕末明治以降の関東史

本展は写真家の出身地（開業地）や制作地を手がかりに、関東地方（東京、神奈川、埼玉、千葉、栃木、茨城、群馬）に根付いた写真文化の広がりを総覧します。

本展の二章で紹介する初期写真群は、関東を舞台に繰り広げられた、明治維新や、近代化により変化する街の姿、訪日外国人との異文化交流の様子などを、鮮明な視覚情報として現在に伝えています。さらに、写真家らが未来に遺した、写真作品の可能性に光をあててご紹介します。

本展は、約 190 点の豊富な初期写真および写真器材を通して、幕末明治の関東地方の歴史を再認識する貴重な機会です。

3 一枚の写真が雄弁に語りだす物語

展示される初期写真は、度重なる災害を生き抜き、100 年の時を超えて私たちの眼前に存在しています。初期写真の鑑賞の醍醐味は、その一枚の写真から、さまざまな物語を読み解くことです。名を残した写真師だけでなく、さまざまな人たちが写真文化と交わり、変わりゆく時代の姿を大切に残しました。

本展には、川崎市市民ミュージアムから、日本人を撮影した現存する最古のポートレート 2 点を出品します。これらの初期写真もまた、災害を乗り越えて次世代へと大切に受け継がれていくことでしょう。

世紀を超えて、人々の手を伝え守り継がれた、初期写真が雄弁に語りだす物語にご注目ください。

展覧会構成と出品点数（予定）

第一章 初期写真抄史（39 点）

第二章 関東の写真家（38 点）

第三章 初期写真に見る関東（114 点） 計 191 点

各章解説

第一章 初期写真抄史

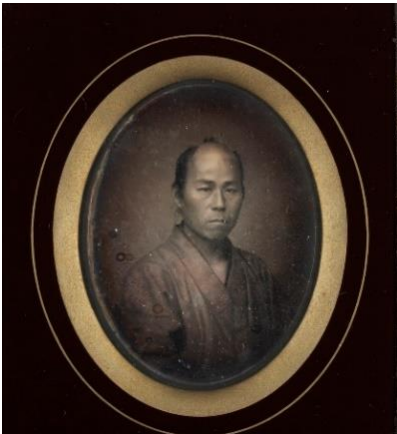
写真発明の起点は、18世紀末に遡ります。フランスで発明されたダゲレオタイプは肖像や風景の記録に用いられ、欧米の人々を魅了しました。イングランドで発明されたカロタイプは、一度に撮影で何枚も同じ写真を得ることができる画期的な技術の発明でした。1870年代末からはゼラチン乾板の普及によって瞬間撮影も可能になります。



1-1

日本では、天保14(1843)年に長崎で写真器材一式の輸入が試みられましたが失敗に終わり、5年後の再挑戦でようやく成功。薩摩藩によって写真技術の研究が進められ、川本幸民の『遠西奇器述』に「直写影鏡ダゲウロテープー」として紹介されています。欧米各国と条約を締結した日本は次々と使節団を派遣し、彼らは現地で撮影した肖像写真を江戸へ持ち帰り、写真の普及に貢献しました。

開港した横浜には日本初の写真館が登場し、ここで写真術を取得した鶴飼玉川が日本人初の写真家として江戸で開業します。文久2(1862)年には横浜で下岡蓮杖が、長崎で上野彦馬がそれぞれ開業しました。彼らはコロディオン湿板方式を用い、アンブロタイプや鶏卵紙のプリントを作りました。彼らを師とする第二世代が慶応～明治初年に開業し、更に弟子を輩出するかたちで写真文化が日本に定着していきます。



1-2



1-3



1-4

1-1) 《アメリカン・ダゲレオタイプカメラ (ルイス・タイプ)》1850年代初頭 ガラス、鉄、真鍮、木 東京都写真美術館

1-2) ハーベイ・ロバート・マークス《慎兵衛(清太郎)像》1851-52年頃 ダゲレオタイプ 川崎市市民ミュージアム

1-3) アンドレ=アドルフ=ウジェーヌ・デイスデリ《(8分割した画面でとらえた少年像)》元治元(1864)年頃 鶏卵紙 東京都写真美術館

1-4) ナダール《第二回遣欧使節 副使 河津祐邦》元治元(1864)年 鶏卵紙 東京都写真美術館

※題不詳のものは便宜上の名称を与え、()で示しました。

第二章 関東の写真家

東京都と関東一円を起点として日本の写真文化は普及していきます。

文久3（1863）年にはフェリーチェ・ベアトが訪日し、外国人居留地があった神奈川県横浜で、日本の風俗を紹介する手彩色の写真を加えたアルバムを制作しました。ベアトの元で研鑽したのが、日下部金兵衛です。彼らの作例をはじめ、手彩色によるカラー写真は明治期の重要な技術でした。

また、明治になると、化学者レオン・ボエルによる横須賀製鉄所の作例が生まれたり、東京では浅草や銀座などの繁華街に写真館がオープンしたりと、さまざまに写真が制作されていきました。埼玉の熊谷、茨城の水戸、栃木の日光市、千葉の千葉市に、それぞれ明治初年に写真館が誕生し、群馬でも明治10（1877）年に富岡で写真館が開業しました。

写真家だけでなく、さまざまな人々が写真文化と交わり、変わりゆく時代の姿を大切に残しました。



2-1



2-2



2-3

2-1) 下岡蓮杖《木村政信像》文久2(1862)年 アンプロタイプ 東京都写真美術館

2-2) 日下部金兵衛《(花売り)》明治中期(1882-97)頃 鶏卵紙に手彩色 日本大学藝術学部

2-3) 江崎礼二《江崎写真館》明治中期(1882-97)頃 鶏卵紙に手彩色 東京都写真美術館

第三章 初期写真に見る関東

江戸が東京になっても、民衆の暮らしは大きく変わることはなく、日本家屋に住み、和服で生活をしていました。欧米の人々は日本のめずらしい風習・風俗やエキゾチックな風景に強い興味を抱いていました。それに応えるべく訪日外国人や日本人写真家たちが、関東各地で数多くの写真を撮影しました。

横浜のミヒャエル・モーザーは、居留地内のニュース雑誌『ザ・ファー・イースト』と契約し、日本中取材しました。この章では、同じ被写体を複数の写真家が撮影した写真も展示します。写真が雄弁に語り出す物語を読み解いていくことは、初期写真を鑑賞する醍醐味といえるでしょう。

関東各地で誕生した写真家たちは、地域や公的機関の要請に基づいて写真を撮るようになりました。彼らの仕事は、すべて関東地方で制作された写真であり、関東地方の人の手に伝えられました。そして度重なる戦乱や災害を生き抜き、100年の時を超えて私たちの眼前に存在しているのです。



3-1 東京駅（丸の内）



3-2 網坂（三田）



3-3 ニコライ堂（神田・御茶ノ水）



3-4 浅草



3-5 上野

3-1) 宮内幸太郎 《中央停車場建築》明治44（1911）年 ゼラチン・シルバー・プリント 横須賀市自然・人文博物館

3-2) フェリーチェ・ベアト《江戸三田の綱坂》文久3（1863）年 鶏卵紙 東京都写真美術館

3-3) 田中武あるいは江崎礼二 《(足場を組んだニコライ教会堂)》明治22（1888）年 ゼラチン・シルバー・プリント 個人蔵

3-4) ミヒャエル・モーザー《東京、浅草》明治初（1868-76）年頃 鶏卵紙 日本大学藝術学部

3-5) 玉村康三郎・騎兵衛《東京、上野》明治中期頃 鶏卵紙に手彩色 東京都写真美術館

関東各地の写真家たち

【東京】鵜飼 玉川（うかい・ぎょくせん）…日本人初の写真家として知られる。

【神奈川】オーリン・フリーマン…日本初の商業写真家。

下岡 蓮杖（しもおか・れんじょう）…長崎の上野彦馬とならび日本の写真開祖の一人。多くの弟子を輩出。

フェリーチェ・ベアト…日本の名勝と風俗を欧米に紹介。

【埼玉】吉原 秀雄（よしはら・ひでお）…小川一真の師匠。磐梯山の噴火（明治二十一年）を撮影。

【千葉】豊田 尚一（とよだ・なおかず）…千葉市本町でスタジオを開業し主に肖像を撮影。

【群馬】小川 一真（おがわ・かずまさ）…富岡製糸場の前で開業。写真印刷で成功し、東京駅開業にむけて鉄道院（のちの日本国有鉄道、現JR）が制作したアルバムを撮影。

【栃木】片岡 如松（かたおか・ときまつ）…横山松三郎の弟子とされる。横山が肖像を撮っている。

横山 松三郎（よこやま・まつさぶろう）…荒廃する江戸城を撮影し江戸文化の記録を今に遺した

【茨城】宇佐美 竹城（うさみ・ちくじょう）…下岡蓮杖の孫弟子とされる



3-6) 宮内幸太郎《第二回全国写真師大会記念撮影》

明治44（1911）年 コロタイプ印刷 東京都写真美術館

主な技法解説

ダゲレオタイプ Daguerreotype

最も早く公表された写真術。銀メッキされた銅板の上に画像を形成します。フランス人のダゲール（Louis Jacques Mandé Daguerre 1787-1851）が考案し、1839年1月に発表しました。この年が写真発明の年とされています。感光面をレンズ側から鑑賞するため左右逆となる画像は解像度が高く、美しく鮮明なもので、見る角度によってポジにもネガにも見えます。肖像写真に多く用いられ、大流行した写真術です。

カロタイプ Calotype and Salted paper

最も早く公表されたネガ・ポジ方式の写真術。英国のタルボット（William Henry Fox Talbot 1800-77）が考案した、紙を支持体とした感光材料による撮影技法。ギリシャ語のカロス "美しい"から命名された方式で、タルボタイプとも呼ばれます。ネガ原板の紙の繊維により、ダゲレオタイプに比べると鮮明さを欠きますが、建造物や遺跡、風景などの記録だけでなく、肖像写真にも多用されました。また単一の原板から多数の印画が作れるという利点を持ちます。

コロディオン湿板方式 Wet collodion process

1847年の卵白湿板方式に続いて公表されたガラス板を支持体とする実用的な撮影技法。一度の撮影で一枚しかできないダゲレオタイプと、紙の繊維のため鮮明さを欠くカロタイプ、それぞれの短所を改良すべく考案されました。

日本における実用的な意味での写真の技術は、この湿板写真から始まりました。鶴岡玉川や上野彦馬、下岡蓮杖らが開国後に来日した外国人から湿板写真を学び、文久年間（年頃）に最初の職業写真家として開業しました。

アンブロタイプ Ambrotype

コロディオン湿板方式が発表されて間もなく、画像を薄く仕上げた湿板ガラスネガの背後に黒い布や紙を置いたり、裏に黒いニスを塗るなどして画像をポジ像に見せる技法が考案されました。この写真は、欧米ではダゲレオタイプの廉価版として普及し、ダゲレオタイプと同様なケースで装丁されました。日本では桐箱に入れて顧客に手渡され、「ガラス写し」あるいは「ガラス生撮写真」などと通称されました。

ゼラチン乾板 Gelatin dry plate

ガラス板に薬品を塗り、濡れたまま撮影しなくてはならないコロディオン湿板方式に対し、乾いた状態で使用できるガラス支持体の感光材料を乾板（かんばん）と呼びます。これにより写真家は撮影の現場での暗室作業から開放され、感光板を自製する必要がなくなりました。

日本には明治16(1883)年頃に最初のスワン乾板が輸入されたといわれています。

鶏卵紙 Albumen paper

1850年に発表された、卵白を感光物質の媒体として使用する印画紙。幕末から明治時代中期にかけて、日本においても中心的に用いられた印画紙。印画紙をネガと密着して太陽光で焼き付けるだけで画像が生じる、焼出し紙です。コロディオン湿板方式が発表されると、このガラスネガと鶏卵紙の組み合わせが19世紀後半の約30年の間、標準的な写真術として普及しました。この一方で、湿度や光の影響による画像濃度の低下や卵白層の黄変は、19世紀の鶏卵紙写真の特徴でもあります。

ゼラチン・シルバー・プリント Gelatin silver print

鶏卵紙の後に広く使われた塩化銀ゼラチン乳剤による焼出し印画紙（Printing out paper, P.O.P.）もゼラチン・シルバー・プリントの一種ですが、銀ゼラチン乳剤を使用し、露光後に現像処理を行って画像を生じさせる近代的な印画紙（Developing out paper, D.O.P.）を指して用いられることが多いのが特徴です。日本での使用例は日露戦争頃から始まったと考えられています。

鶏卵紙に手彩色 Hand-colored albumen print

鶏卵紙による紙焼き写真に手で彩色を施したもの。明治期の日本の写真の特徴付ける、いわゆる横浜写真では、一見カラー写真に見まがうような繊細な色付けが画面全体に施されたものも多くあります。

横浜写真は、幕末から明治初年にかけて下岡蓮杖やベアトが創始し、明治20年代から30年代半ばにかけて全盛期を迎える外国人向けのお土産写真でした。名所旧跡や風俗などが対象として撮影され、鶏卵紙に焼き付けられた写真は、そのほとんどに手彩色が施されていました。日本画の絵師が雇われて彩色の作業をしたといわれ、膨大な数の写真が横浜を中心として生産されました。

コロタイプ Collotype

写真印刷法の一つであるコロタイプの原型は、1855年に考案された写真石版法フォトリソグラフィー（Photolithographie）です。1870年にイギリスのオートタイプ社がこれをコロタイプとして発表しました。この印刷技法は写真の再現に優れており、発表後から急速に普及し、ウッドベリタイプなどの複製技術に置き換わっていきました。比較的少数数の写真印刷などに適しているところから、日本でも卒業アルバムなどの印刷に多用され1960年代まで広く使われました。

（展覧会図録より一部抜粋）

関連イベント

日本初期写真史連続講座（計5回）

展覧会を記念して幕末明治の関東地方およびその初期写真の知と理解が深まる講座です。

3月6日(金) 18:00-19:30 齋藤多喜夫「横浜居留地と初期写真」

3月20日(金・祝) 18:00-19:30 井桜直美「幕末明治の東京―変わりゆく江戸の町並み―」

4月3日(金) 18:00-19:30 三井圭司「初期写真と関東地方」

4月17日(金) 18:00-19:30 菊地勝広「横須賀製鉄所と初期写真」

5月15日(金) 18:00-19:30 高橋則英「幕末明治の写真技術」

会場：東京都写真美術館 2階ロビー特設会場

各回定員：50名 ※事前予約制、整理券不要、先着順。直接会場へお越しください。

アンプロタイプ制作技法デモンストレーション

幕末明治における日本写真技術の特徴であるアンプロタイプ（ガラスに画像を定着する技術）の制作プロセスを見学するデモンストレーション・イベントです。現在では失われた写真技術のプロセスを知る絶好の機会です。（開催内容は各日とも同様）

日時：~~3月14日(土)~~、5月2日(土) 各日 14:00-16:30

講師：猪俣良文（アトリエ シャテーニュ）

会場：東京都写真美術館 1階スタジオ 定員：50名、入場無料、先着順

※3月6日、3月20日の連続講座は中止と致します。楽しみにされていた皆様には誠に申し訳ございません。

4月以降の情報につきましては、改めて当館ホームページでお知らせいたします。

鶏卵紙着彩ワークショップ

鶏卵紙に手彩色の作品は日本の風俗写真における特徴的な技術です。本ワークショップでは、出品作品のイメージを用いた鶏卵紙のプリントに着彩を行います。

日時：5月10日(日) 14:00-17:30

講師：三木麻里（写真修復師）

会場：東京都写真美術館 1階スタジオ

定員：20名、事前予約制、先着順

参加費：2,000円（消費税込）

※募集詳細は決定次第ホームページで発表します。

展覧会監修者によるギャラリー・トーク（計3回）

本展監修者である高橋則英（日本大学芸術学部教授）によるギャラリー・トークを開催します。作品を前に幕末明治の写真技術を深くわかりやすく紹介します。

日時：~~3月24日(火)~~、4月7日(火)、5月5日(火・祝) 各日 16:00-17:00

展覧会チケット（当日消印）をご持参のうえ、3階展示室入口にお集まりください。

担当学芸員によるギャラリー・トーク（計12回）

期間中の毎週金曜日 16:00より、担当学芸員による展示解説を行います。

展覧会チケット（当日消印）をご持参のうえ、3階展示室入口にお集まりください。

※3月20日（金・祝）は手話通訳つきで行います。

Gallery Tours in English（計3回）

アリス・ゴードンカー（ライター、日本初期写真研究者）による英語展示解説を行います。

日時：3月19日（木）18:00—19:00、4月21日（火）11:00—12:00、5月21日（木）16:00—17:00

展覧会チケット（当日消印）をご持参のうえ、3階展示室入口にお集まりください。

※事業はやむを得ない事情で変更することがございます。あらかじめご了承ください。

展覧会図録

『日本初期写真史 関東編 幕末明治を撮る』

出品作品図版のほか、本展監修者、担当学芸員によるテキスト、作品技法等を収録。

価格 1,980 円（税込）、東京都写真美術館刊。

※ミュージアム・ショップ「NADiff BAITEN」の販売方法が決定次第、ホームページにてお知らせいたします。

開催概要

展覧会名[和] 日本初期写真史 関東編 幕末明治を撮る

展覧会名[英] History of Early Japanese Photography: Kantō Region Images of Japan, 1853-1912

会 期 2020 年 3月3日（火）—5月24日（日）

主 催 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会

協 賛 ライオン、大日本印刷、損保ジャパン日本興亜、日本テレビ放送網

会 場 東京都写真美術館 3階展示室

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

www.topmuseum.jp / 電話 03-3280-0099

開館時間 10:00—18:00（木・金は 20:00 まで）※入館は閉館の 30 分前まで

休館日 毎週月曜日 ※ただし 5月4日（月・祝）は開館

観覧料 一般 700（560）円ほか

※（ ）は 20 名以上団体、小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料、第 3 水曜日は 65 歳以上無料。

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。掲載をご希望の際は広報担当までご連絡下さい。

* 図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。

* 図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

Yebisu Garden Place, 1-13-3 Mita Meguro-ku, Tokyo, 153-0062

Tel 03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 www.topmuseum.jp

展覧会担当 三井圭司 k.mitsui@topmuseum.jp / 石田哲朗 t.ishida@topmuseum.jp

広報担当 久代 明子 平澤 綾乃 岡田なつき press-info@topmuseum.jp